



# A LIVING LEGACY

*Preserving Intangible  
Culture*

**生きている遺産  
無形文化を守る**



米国国務省  
第15巻 第8号

---

### 米国国務省国際情報プログラム局

発行責任者	Dawn L. McCall
編集主幹	Jonathan Margolis
出版部長	Michael Jay Friedman

---

編集長	Mary T. Chunko
副編集長	Nadia Shairzay Ahmed
プロダクション・マネージャー	Janine Perry
デザイナー	Sylvia Scott

---

写真編集	Ann Monroe Jacobs
表紙デザイン	Diane Woolverton
レファレンス・スペシャリスト	Marin Manning

#### 表紙カバー

テキサス州の舞踊団バレー・folklorima・デ・サンアントニオによる伝統的なラテン舞踊

© Getty Images/Donovan Reese

Printed in Japan

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USA のロゴ名で電子ジャーナルを発行し、米国や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国の社会や価値観、考え方、さまざまな制度について検証しています。

最新号はまず英語で発行され、続いて電子版のフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数と、号数別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国外での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

ジャーナルに関するご意見等は、米国大使館、アメリカンセンターJapan、および各地のアメリカンセンター・レファレンス資料室、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, eJournal USA  
IIP/CD/WC  
U.S. Department of State  
2200 C Street, NW  
Washington, DC 20522-0501  
USA  
E-mail : eJournalUSA@state.gov

---

編集・発行：アメリカンセンターJapan（2014年7月）  
本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

# 本号について



© AP Images/Ai Grillo

米国では、各地の市民、地域団体、慈善団体などがそれぞれ米国の多様な文化遺産をたたえ、大事に守っている。写真はアラスカ州アンカレッジ市の文化イベントで韓国の太鼓を演奏する少女。93の言語が使われているアンカレッジは、米国の多くの土地と同様、多種多様な文化と人々が活発に交わる場所である

米国には、さまざまな民族の貢献を土台とする豊かで多様な文化遺産がある。それは例えば、何千年もの歴史を持つアメリカ先住民の文化と伝統、そして過去何世紀、何世代にもわたり米国に移住してきた多くの移民たちの慣習、文化、芸術などである。

こうした文化遺産の中でも有形のものも多くは、博物館やギャラリーなど公共・民間の機関によって保護されている。しかし、有形度が低い表現形式の文化を最も効果的に保護することができるのは、博物館よりも、そうした文化を実際に演じて表現する人たちである。ガ族の音楽で聴衆を魅了するガーナ系米国人のドラマー、アメリカ先住民の語り部、そして絶滅の恐れのある言語を守ろうとする学者といった人たち

が、米国の文化を豊かなものになっている。

米国の文化が今も活気を維持し、世界の関心を集めているのは、全米各地の人々が、無形の芸術・文化の表現を生活の一部とすることによって守り通しているからにほかならない。「eJournal USA」本号では、そうした人たちの物語を探る。



米国国務省 第15巻 第8号

## 生きている遺産 無形文化を守る

### 4 無形文化遺産

#### 文化的民主主義の新たな地平線

ジェームズ・カウツ・アーリー、ライアン・F・マニオン

文化の保存は、記念碑や建造物や工芸品だけでなく、音楽、舞踊、言語などもその対象とする。

#### 言語

### 7 米国内の危機言語を救う

ジュリエット・ブレビンズ

危機言語を活性化させ、米国の言語の多様性を守るために、多くの個人や組織が努力をしている。

### 11 アラスカ先住民言語の保存

#### 1 語ずつ着実に

カイル・ホブキンズ

フランス人のギヨーム・ルデュイは、絶滅したアラスカ先住民言語イヤック語を復活させるためにアラスカを訪れる。

### 13 アメリカ先住民の語り部

#### 話し言葉で生き続けるダコタ文化

#### インタビュー

メアリー・ルイズ・ディフェンダー・ウィルソンが、ダコタ族の語り部としての仕事について、また口承文化を維持することの大切さについて語る。

### 15 マルチリンガルであること

文筆家、学者、著名人が、米国の言語の多様性を持つ難しさと利点について述べた言葉。

#### 音楽

### 17 スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズ：「音の博物館」

D・A・ソネボーン、メーガン・バナー・サザランド  
スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズは、世界中の音楽、話し言葉、演劇などの録音を収集し、一般に公開している。

### 20 ガーナの伝統音楽をドラムで表現するカップル

#### インタビュー

ガーナ人のドラマー、ヤクブ・アディと、演奏グループ「オダッダ！」のマネージャーを務める妻アミナ・アディが、ガーナ音楽の普及を目指す2人の活動について語る。

#### インタラクティブ資料

### 21 世界の文化の保存

#### 文化保存のための米国大使基金

「文化保存のための米国大使基金」は、世界各地の文化遺産保存プロジェクトに助成金を与えることによって全世界の文化の保護に貢献している。

## 舞踊

### 23 世界の舞踊を支える地域のフェスティバル

マイケル・ギャラント

毎年開催されるサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルは、米国内外のユニークなダンスを紹介する催しとなっている。

### 26 カリフォルニア州で生き続けるカンボジアの伝統舞踊

マイケル・ギャラント

舞踊家チャリヤ・バートはカリフォルニア州北部でカンボジア舞踊を踊り、指導している。

## フォトギャラリー

### 27 文化遺産を守る米国人

大都市で、また小さなコミュニティで、音楽、ダンス、その他の文化的表現を保存する米国人の姿を紹介する。

## 討論 Who's Right?

### 30 文化財の返還

バージニア大学のマルコム・ベル3世とシカゴ美術館のジェームズ・クノーが、美術・工芸品をその生まれた土地へ返すことの是非について討論する。

### 34 米国の保護法

#### 文化遺産保護の法的枠組み

パティ・ガーステンプリス

米国には、彫刻などの有形な作品だけでなく、言語など無形の文化的表現をも保護する法律がある。

### 36 参考資料

文化遺産保存に関する出版物・ウェブサイト。

# 無形文化遺産

## 文化的民主主義の新たな地平線

ジェームズ・カウンツ・アーリー、ライアン・F・マニオン

© 2010 Smithsonian Institution



Courtesy of Jeff Tinsley, Smithsonian Institution

毎年ワシントン DC で開催されるスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルでは、米国内外のコミュニティの言語、口承文学、音楽、舞踊、伝統工芸などの文化が紹介される

ジェームズ・カウンツ・アーリーは、スミソニアン協会  
フォークライフ・文化遺産センター文化遺産政策部長

ライアン・F・マニオンは、スミソニアン協会フォークライフ  
フ・文化遺産センター元インターン（応用民族音楽学）

従来、文化遺産の保護とは、歴史的な建造物や記念碑、そして芸術作品を保存することであった。しかし1960年代以降、多様な文化やその表現方法への評価が高まってきたことから、文化遺産の保護の対象が広がり、音楽、言語、舞踊などいわゆる「無形」の文化表現も含まれるようになった。それには米国の国立博物館・学術文化研究機関であるスミソニアン協会が、特に、数多くの教育・文化・政府機関との協働・協力

を通じて重要な役割を果たしてきた。今日では、数々の機関や個人が、有形・無形を問わずあらゆる形の文化遺産の保護に貢献している。

その方向性を定める先駆けとなったのは、1967年にスミソニアン協会フォークライフ・文化遺産センター（CFCH）が、米国内外の多様な地域社会と協力して遺産保存プログラムを設立したことであった。その成果として、ナショナルモール（ワシントン記念塔と米国連邦議会議事堂の間にある公共の芝生区域）で第1回スミソニアン・フォークライフ・フェスティバルが開催された。当時としてはまだ新しい文化遺産保存へのアプローチとして、全米各地の言語、口承文学、音楽、舞踊、伝統工芸、社会慣習、民族科学、伝統農業技術といった文化表現が紹介された。その中には、中国の獅子舞、



Courtesy of Smithsonian Institution

2007年のスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルでカンボジアの伝統舞踊「黄金の人魚」を踊るメリーランド州のカンボジア文化グループ

アメリカインディアンの砂絵、陶芸、ボヘミアン・ハンマーダルシマー・バンド、語り部、マウンテンバンジョーの演奏、ロシアのコーラス、そしてブルースやゴスペルソングなどがあった。この無料フェスティバルの第1回には、50万人近い人々が集まった。今ではスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルは毎年開催され、毎回100万人以上が参加しており、米国内だけでなく外国の文化も紹介している。スミソニアン・フォークライフ・フェスティバルは、普通の市民がそれぞれの文化遺産を実践し保存していく過程を強調することによって、異文化への理解と異文化を称揚したい気持ちの双方を広めることに大きく貢献した。

スミソニアン・フォークライフ・フェスティバルは、普通の市民がそれぞれの文化遺産を実践し保存していく過程を強調することによって、異文化への理解と異文化を称揚したい気持ちの双方を広めることに大きく貢献した。各地の地域社会や、あまり知られていなかった職人たちが、想像力と獨創性を支える重要な存在として認められるようになるにつれ、保護に値する「価値ある」文化的表現の範囲と定義もそれに比例して広がった。文化団体が草の根レベルで地域社会と手を結ぶという新たなパラダイムが作られ、それが米国内外の他の文化団体にも波及して、同じような形の文化遺産管理方式が広がっていった。

1990年代末期には、「無形文化遺産 (ICH)」という概念が登場した。これは、スミソニアン協会フォークライフ・文化遺産センターが米国の他の文化団体と共に40年近い活動

スミソニアン・フォークライフ・フェスティバルは、普通の市民がそれぞれの文化遺産を実践し保存していく過程を強調することによって、異文化への理解と異文化を称揚したい気持ちの双方を広めることに大きく貢献した。

の中で掲げてきた原則を反映したものであった。そうした団体には、連邦議会図書館のアメリカン・フォークライフ・センター、全米芸術基金の民芸・伝統芸術プログラム、各州の民俗学者、世界各地の学者、そして自分たちの文化遺産を表現する芸術家や職人のコミュニティなどがある。今では無形文化遺産の概念が国内・国際的な文化的プロトコルに影響を及ぼしている。初期の活動は、もっぱら先進諸国や有力な社会集団が生み出した記念碑、彫刻など有形の芸術作品を対象とする傾向があった。各国の国立文化機関は、自国内の多様な社会が生み出す各地の小規模な文化表現を無視することが多かった。無形の文化遺産も有形のものと同様に重要であるという認識は、こうした初期の慣習からの抜本的な脱却であり、保存する価値のある文化表現の範囲を大きく広げるものであった。

無形文化遺産の保存は、現在も各国内および国際的な文化に関する討論、慣習、プロトコルに影響を及ぼしている。多様な意見が取り入れられ、より多くの表現形態が保存の対象となっている。世界各地で文化保存が、より包括的、民主的、かつ開放的になりつつある。米国の文化団体は、世界中の人々の生活を豊かなものにするために、国内外の各種機関や地域社会と協力して文化保存に努める能力と意志を備えている。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。



# 米国内の危機言語を救う

ジュリエット・ブレビンズ



© AP Images /Julia Cumes

ジェシー・リトル・ドー・ベアード（左）はマサチューセッツ工科大学で言語学を学び、初めてのサンクスギビングディナーに参加したアメリカ先住民の言語を保存する「ワムパノアグ語復活プロジェクト」を創設した。ベアードと握手しているのは、デバル・パトリック・マサチューセッツ州知事

ジュリエット・ブレビンズは、ニューヨーク市立大学大学院言語学教授。危機言語同盟のディレクターの1人

今私たちは世界的な言語危機の真ただ中に生きている。2週間に1つ、世界のどこかで言語が死滅している。世界の6,700の言語のうち半数が今後100年以内に消滅する危険がある。\*この消失に歯止めをかけることができなければ、悲劇的な結果を招く。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の最近の報告書によると、言語は個人および集団のアイデンティティを具体化し、そうした人々の無形の文化遺産を表現するものである。

長い歴史を通じて人類が居住し、幅広い移民を受け入れてきた米国には、世界でも有数の多様な言語を話す人々が住んでいる。しかし、その米国でも、特に先住民の言語が絶滅の危機にひんしている。過去500年間に北米では100を上回る数の先住民言語が絶滅した。また、その言語を話す老人が

（左） ハワイ州ケアアウでハワイ語のアルファベットを教える幼稚園教師ナイリマ・ゲイソン  
© AP Images /Tim Wright

わずかに残っているだけで、消滅寸前となっている言語も多い。従って、とりわけ重要なのは、米国の先住民言語を活性化させ、保存し、記録し、教えること（言語によっては書くこと）、そして最も重要な点として、多くの人々がその言語を話すようにすることである。

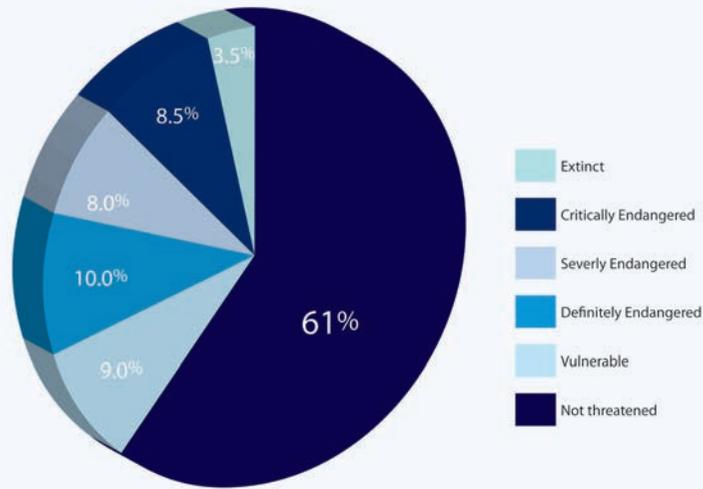
最も注目値する言語復活活動の中には、しばらく使われていなかった自分たちの言語を復活させようとするアメリカ先住民の運動がある。米国の小学生は必ず、1621年に最初の入植者たちとワムパノアグ（ウォパナイク）族インディアンが初めてのサンクスギビング（感謝祭）に食事を共にしたことを学ぶが、ワムパノアグ語をはじめとする東アルゴンキン語群の言語がその後間もなく消滅したことはほとんど教えられていない。アメリカ独立革命のころには、ワムパノアグ語を話すのは少数の老人に限られ、いくつかの単語リストと聖書の翻訳を残すのみとなっていた。しかし、これらの資料の存在と、同系の言語に関する知識とによって、奇跡と言ってもいいことが起きた。マサチューセッツ工科大学大学院で言語学を学んでいたワムパノアグ族のジェシー・リトル・

ドー・ベアードが、自分の部族の言葉を話すことを夢見て、1997年に「ワムパノアグ語復活プロジェクト」を立ち上げたのである。今日では、ワムパノアグ語の授業があり、9,000語以上を収録する辞書の編さんが進んでいる。

もうひとつ注目すべきは、マイアミ部族の言語学者で「マイアミアプロジェクト」のディレクターを務めるダリル・ボールドウィンの活動である。米国中西部のアルゴンキン言語であるマイアミ語は、ダリルが生まれたころにはもう話者がいなかったが、彼は青年時代に独学でこの言語を学び始めた。主にこうしたダリルの努力により、今ではマイアミ語を話す人々が少数ではあるが存在し、その人数は増加しつつある。また、子どものための言語カリキュラム、民族植物学研究、マイアミ族の伝承物語などのマイアミ文化活性化にも、マイアミ語の復活がなくてはならない役割を果たしている。

このような優れた個人的な活動に加えて、多くの部族が独自の活性化・保存・記録プロジェクトを始めている。17万人の話者を持つナバホ語（ディネ・ビザード）は、メキシコより北では最も広く話されている先住民言語であるが、ナバホ語を話さないナバホ族の方がナバホ語話者より早いペース

## 世界の6,700言語の活力



**Vulnerable:** most children speak the language, but it may be restricted to certain domains such as the home

**Definitely Endangered:** children no longer learn the language as mother tongue in the home

**Severely Endangered:** the language is spoken by grandparents and older generations; while the parent generation may understand it, they do not speak it to children or among themselves

**Critically Endangered:** the youngest speakers are grandparents and older, and they speak the language partially and infrequently

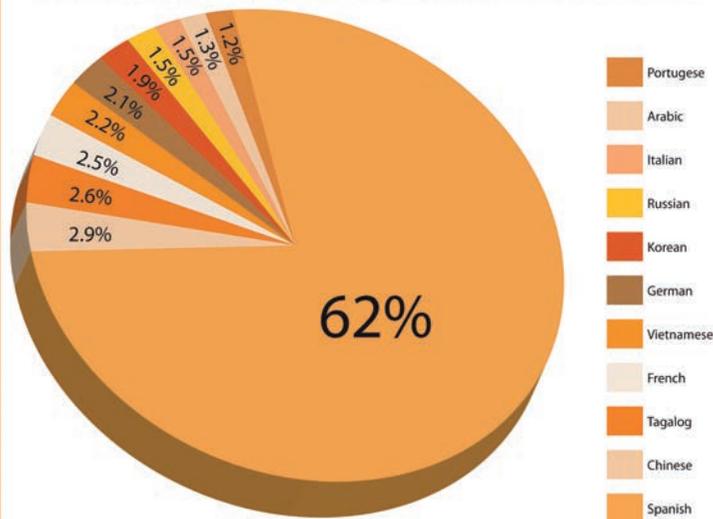
**Extinct:** there are no speakers left

データ出典 Moseley, Christopher(ed). 2010. Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edn, Paris: UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlus>

Erin Riggs

## 米国の言語の多様性

Close to 20% of the total U.S. population speaks a language besides English. Of this group, language distribution is as follows:

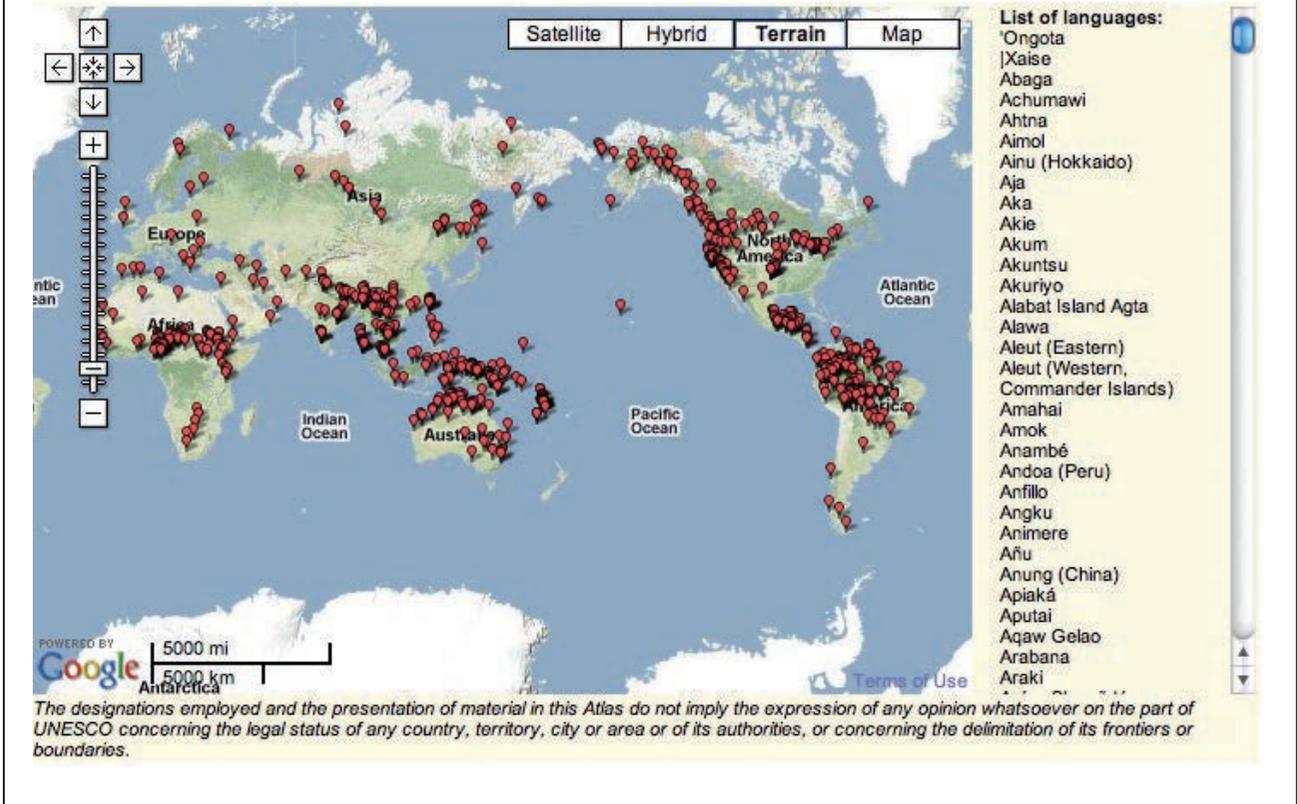


データ出典 The Modern Language Association Language Map, MLA. [http://www.mla.org/resources/map\\_main](http://www.mla.org/resources/map_main)

Erin Riggs

## ユネスコによる世界の危機言語地図

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、絶滅危惧言語、絶滅危機言語、および絶滅言語に分類した言語地図を作成している。下の地図は、ユネスコが「絶滅の危機にひんしている」とする 578 言語の一部の分布を示すものである。



出典：Moseley, Christopher (ed.). 2010. Atlas of the World's languages in Danger, 3rd edn. Paris, UNESCO Publishing.  
Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>

© UNESCO Publishing

で増えている。40年前には入学する子どもたちの90%がナバホ語を話していたが、現在はその比率が30%を切っている。ナバホ語を維持するために、アリゾナ州セイリにあるディネ・カレッジではナバホ語プログラムを設け、ナバホ語の教師や通訳・翻訳者を養成している。多くの米国民は、ナバホ語が第2次世界大戦中「コードトーカー」の暗号に使われたことを知っているが、ナバホ語の複雑な構造と文化的な力を知る人は少ない。ナバホ語は、アサバスカ諸語の他の言語と同様、世界の言語の中でも有数の複雑な語構造を持ち、例えば動詞語幹の前に接頭辞が11個も付くことがある。

米国先住民言語の復興活動として最も成功したものの1つが、ハワイのポリネシア語の活性化である。19世紀には、このハワイ語を母語とする話者が3万7,000人おり、ハワイ語で伝説や歌や宗教を伝承していた。しかし20世紀までには、ハワイ語の話者は1万人未満となり、その中でも若者は非常に少なかった。

1983年に、ハワイ州で保育園・幼稚園の言語プログラム

「アハ・プナナ・レオ（言語の巢）」が導入された。ハワイ州は米国で唯一、指定母語がある州である。このプログラムは、幼児と幼稚園児に完全なイマージョン（完全没入・集中）語学教育の環境を提供するもので、世代間の言語の伝承を確実にする最も自然な方法の1つとなっている。「アハ・プナナ・レオ」は大きな成果を取め、間もなくハワイ語の授業の拡張が必要となった。1987年に、ハワイ州憲法によりハワイの文化・言語・歴史の研究促進が義務付けられ、州教育省がハワイ語イマージョン教育を行う小学校・中等学校「クラ・カイアプニ」を導入した。現在、クラ・カイアプニ・プログラムには（幼稚園から高校まで）1,500人を上回る児童・生徒がいる。ハワイ語の話者数は8,000人に増え、今では何十種ものハワイ語出版物が出ている。

米国の言語の多様性をさらに高めているのが、移民のもたらす数多くの言語である。ニューヨーク市では、305平方マイルの市内で使われている言語が800種類に上ると推定されており、言語の集中度と多様性では世界有数の地域となっ



© AP Images/Hearst-News, Jeremy Hogan

インディアナ州のアフリカ言語夏期共同研究所でスワヒリ語を教える教授。同研究所は、米国内におけるアフリカ言語の話者数を増やすことを目指している

いる。そうした言語の多くは広く使われているが、少なくとも半数は、絶滅の危機にひんしているか、深刻な脅威にさらされている。

過去数年間に、ニューヨーク市をはじめとする米国の主要都市で、危機にひんしている少数派言語の確認、記録、保存、教育のために、言語学者、言語復興活動家、地域のリーダーらが協力している。例えば、ニューヨーク市にある「危機言語同盟」は、絶滅の危機にひんしている言語を確認し記録し保存することを目指す非営利組織である。そうした言語には、ダルフル難民の話すマサリート語やザガワ語、ショチストラファカ・アムツゴ語やアヤウトラ・マサテク語などのメキシコおよび中米の数十の先住民言語、スパン語やミングレル語などのコーカサス地域の危機言語、西アフリカの多数の絶滅の恐れのある言語などがある。最近設立された危機言語同盟は、数十人の熱心なボランティアと強力な草の根レベルの活動に支えられているが、これは米国民が言語と文化の多様性に大きな価値を見いだしていることを示す一例にすぎない。

米国の大都市から遠く離れた地域にも、新たな「言語センター」が生まれつつある。各地の言語地域社会のニーズに応えるために設立されているこれらのセンターは、地域社会の人たちを対象に言語の記録・記述の訓練、語学講座、辞書編さん、地元の先住民言語による地名を使った地図の作成などさまざまな機能を果たすことができる。中でも最も歴史の古いセンターの1つであるアラスカ州先住民言語センターは、同州の20種類の先住民言語の記録と促進のため、1972年に州の立法により設立された。そのほかにも、アラスカ州のシアラスカ伝統研究所、インディアナ州のスリーリバーズ言語センター、アリゾナ州ウィンドーロックのナバホ言語アカデミーなどがある。これに対して大都市の言語センターには、大きな移民グループの話す言語を維持することを目的とするものが多い。例えばニューヨークには、世界有数のイディッ

シュ語研究機関の1つである YIVO ユダヤ調査研究所がある。

全米各地で、部族、地域団体、政府機関、慈善団体、大学、専門家団体、そして市民が、さまざまな言語を活性化し米国の言語の多様性を維持する努力を続けている。

\* 言語がどの時点で危機にひんしているとされるか、という点については議論が続いているが、主として2つの要因が考慮される。1つは、話者が何人残っているかということである。2つ目の、そしてより重要な要因は、話者の年齢構成である。話者が何十万人いても、そのほとんどが40歳を超えているなら、それはその言語が子どもたちに伝えられていないということ、そして1〜2世代の間に消滅する可能性があるということを示す徴候である。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# アラスカ先住民言語の保存

## 1 語ずつ着実に

カイル・ホプキンス



© AP Images/Anchorage Daily News, Bob Hallinen

ギヨーム・ルデュイは、絶滅しつつあるアラスカ先住民言語イヤック語を学ぶためにフランスからアラスカ州に渡った。写真は、言語学者マイケル・クラウスの著書 *In Honor of Eyak: The Art of Anna Nelson Harry* を持つルデュイ

カイル・ホプキンスはアンカレッジ・デーリー・ニュース紙記者

ある夏の朝、アラスカ州最大の都市にある家の居間で、モナ・カーリーは耳を澄ませていた。正面に座っているフランス人の青年が、「アワアダー」と言った。

語学に熱心な、この21歳の内気な青年ギヨーム・ルデュイは、絶滅したアラスカ先住民言語イヤック語で「ありがとう」という言葉をできるだけ正確に発音しようとしているのだった。

カーリーの母親マリー・スミス・ジョーンズは、イヤック語

の最後の母語話者だった。2008年に、ジョーンズの死と共にイヤック語も死語となった。アラスカ州の20種類の先住民言語の中で最初に絶滅したのがイヤック語であった。専門家は、消滅しつつあるイスラットやインディアンの言語を新しい世代が受け継いでいかなない限り、今後も絶滅する言語がさらに増えていくことを恐れている。そして今、まばらなひげをはやし、頭にバンダナを巻いた細身のハンサムな青年、ルデュイが、アンカレッジの友人の家で、カーリーの先祖の言葉をフランス語なまりで話しているのだった。母親の母語が話されるのを聞いて感動したカーリーは、ルデュイにもう1度言ってくれるように頼んだ。

「ありがとう」。彼はイヤック語で繰り返した。

フランスの人口約18万人の都市ルーブルからアラスカを訪れたルデュイは、それまでに少なくとも6つの言語を学んでいた。彼はフランスで育ったが、ほかの男の子たちがプレイステーションで遊んでいるときに、珍しい方言を夢見ていた。ルデュイがアラスカ州コルドバ市を訪れたことが地元紙とウォールストリート・ジャーナル紙に報道されたことがきっかけとなり、アラスカ州ではこの絶滅した言語を記録するだけでなく復活させることが論じられるようになった。多くの人々が、イヤック語の絶滅は未来を象徴するものであると考えた。他の先住民言語も、若い世代が学び、教えていかなければ絶滅する危機にあった。

「アラスカ州を訪れることによって、アイデンティティーを求める民族の運命を直視することができ、絶滅した言語を取り戻すのは、実際には不可能ではないということが理解できました」とルデュイは語っている。

「私は初めて、『現状を何とかしたい』という思いを実行に移す真の関心と熱意を目にした」と語るのは、1995年にカ



© AP Images/Anchorage Daily News, Marc Lester

イヤック語の最後の母語話者マリー・スミス・ジョーンズ首長は2008年に89歳で死去した

リーの母親に関するドキュメンタリーを監督したアンカレジの映画監督ローラ・ブリス・スパーンである。

彼女は、何十年も消滅への道をたどっていたイヤック語への関心を高めるために、イヤック保存評議会と協力して活動している。

イヤック語は、アラスカ湾沿いの現在のコルドバ市から東のヤクタット市までの地域に住む先住民の言語だった。フェアバンクス市に住む言語学者マイケル・クラウスによると、歴史学者や言語学者の知る限りでは、イヤック族の人口は多いときでも数百人にすぎなかったという。クラウスは、イヤック語の辞書の編さん者であり、ルデュイのアラスカ訪問中は彼のメンターのような役割を果たした。

米国人がアラスカに入ってくる前にも、イヤック族は既にアラスカ南東部のトリングット族に吸収されつつあった。カリーの話では、彼女の母親は学校でイヤック語を話して罰せられたという。また、現在ではイヤック族の血を半分引いている人たちを含めても、イヤック族の人口は120人に満たないという。

ルデュイは10代のころ、アラスカ先住民のさまざまな言語について調べているときにイヤック語に出会った。彼はブリス・スパーンのメールアドレスを調べて、彼女が作成したイヤック語の教材のDVDを送ってくれるよう依頼し、イヤック語の勉強を始めた。そのときルデュイは13歳だった。

何年もたってから2人がパリで初めて会ったとき、ブリス・スパーンは、この若者がすでにかなりイヤック語を学んでいて、クラウスの本からまとまった文章をいくつか引用できることを知って驚いた。

彼女はルデュイをアラスカ州に招き、彼は2010年6月から6週間アラスカに滞在することになった。フェアバンクスではクラウスがルデュイに、イヤックの伝説を1語ずつ分析する作業をさせて、イヤック語の理解を深めさせるとともに、彼の能力を試した。

「私の仕事というのは、たとえ私がやりたいことをやり終えたとしても、まだ誰かが一生をかけて研究することが残っているという仕事なのです」とクラウスは6月に語っている。

それは、まだ自分の進路を決めかねている20代のルデュイには肩の荷が重いかもしれない。アラスカに来た当初、彼はまだイヤック語保存の先導者の役割を果たしたいのかどうか分からなかった。ルデュイは彫刻家になる夢も持っていたからである。しかし「アラスカ滞在が長くなり、いろいろな人たちと出会う中で、彼はこれが自分の本当にやりたいことだという思いを強くしていったのです」とブリス・スパーンは言う。

最近ルデュイはメールで次のように書いている。「私はクラウス博士と協力して、イヤック族の人たちにイヤック語を教えるつもりです。イヤック族の人たちがまさにイヤック語の保存と復興のカギなのです」

すでにイヤック語の復活の兆しが見えている。ルデュイはフランスに戻ってから、ブリス・スパーンらと協力して、毎週イヤック語の単語やフレーズをフェイスブック\*とツイッターに載せるプロジェクトを始めている。

フランスに戻ってからのメールで彼は次のように述べている。「闘いはまだ終わっていません。兵士はイヤック族の人たちで、私は彼らに武器を提供しているにすぎません。私が彼らからもらった最大の贈り物は彼らの勇気です」

\*<http://www.facebook.com/group.php?gid=49706794284&ref=search>

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# アメリカ先住民の語り部

## 話し言葉で生き続けるダコタ文化

メアリー・ルイーズ・ディフェンダー・ウィルソンは、そもそもダコタ・スー族の一員であり、著名なアメリカ先住民の語り部でもある。1999年には全米芸術基金の国家遺産特別研究員に選ばれ、現在はノースダコタ州スタンディング・ロック・インディアン保留地のシッピング・ブル・カレッジで教えている。

問：ダコタ族の文化的な特徴を教えてください。

ウィルソン：ダコタ族は、スー族の主な4つのグループのうちの1つです。私たちの口承文化から私が学んだのは、ダコタ族の特徴はその言葉だということです。私の先祖の言葉はウィチエナ語だと言われています。

問：ダコタ族の口承文学を保存する上で、どのような問題に直面しましたか。

ウィルソン：ダコタ文化の中でも口承文学は伝承の難しいものの1つです。私はそうした物語を、ダコタ族の方言であるウィチエナ語で聞いて育ちましたが、今、保留地に住んでいるダコタ族のほとんどは英語を話す人たちだからです。私が聞いたウィチエナ語の話を英語で聞かせようとする、その過程で失われるものがあるので、伝承が難しくなるのです。

しかし私の授業では、物語の一部あるいは特定のフレーズをウィチエナ語で話すようにしています。物語を話すときには必ず聴衆の顔を見て、自分の言いたいことが伝わっているかどうか、コミュニケーションがきちんとできているかどうかを確かめますが、たとえ私の言葉が正確にわからなくても、何らかのコミュニケーションが成立し、物語の持つメッセージが聴衆に伝わっているようです。



アイスランドのホフソスで米国人とアイスランド人の聴衆のためにダコタ族の物語を語るメアリー・ルイーズ・ディフェンダー・ウィルソン（右上）

Image by Troyd Geist, courtesy of the North Dakota Council on the Arts

問：ダコタ族の口承文学の主なテーマにはどのようなものがありますか。

ウィルソン：私たちの教えは、ダコタ族は進化によって発展してきたというものです。ごく初期に進化したのは、ウクトミ、つまりスパイダーマン、という人間に近い形の存在でした。これは今テレビでやっているスパイダーマンとは違います。原始的なウクトミは、文明人のように行動しようとしたのですが、あまりうまくいきませんでした。

ダコタ族は、原始的な存在が人間に進化しても、私たちの中にあるものの一部は決して変わらず、原始的なままで残っていると考えています。それがダコタ族の物語の重要なテーマの1つです。私たちの中で決して変わらない部分が4つあり、それが物語によく使われています。1つは食べ物必要性、2つ目は怒りと暴力、3つ目は集団行動です。

そして常に変らないものの4つ目は私たちの性的な特質です。ダコタ族は、それが最も前面に出てこないように、またそのことばかりに気を取られないように、そしてそれを冒瀆（ぼうとく）することのないようにするための手段を考えました。こうしたことが私たちの物語のテーマとなっていま

す。これらは今でも私たちが生きていく上で意味のあることだと思います。

問：特に気に入っている物語を1つ教えてください。

ウィルソン：「世界に決して終わりは来ない」という物語があります。これは洞窟に住む老女、非常に年老いた女性の話です。彼女はそこに犬といっしょに住んでいました。洞窟の中で火をおこし、鍋を火にかけて料理をしていました。

また布切れを巻いて衣服につける飾りを作っていました。私たちは衣服などに付けるビーズの飾りを交易商人から買うようになるまでは、ヤマアラシのとげを飾りに使っていました。でも、この老女は布切れで衣服の飾りを作っていたのです。デザインも自分で考えていました。火が消えかかると立ち上がって、薪をくべました。年を取っていたので動きが鈍く、火のところへ行くのにも時間がかかりました。彼女が立っていくと、すぐに犬が布切れの飾りをかみちぎってしまいました。

戻ってきて再び座った老女はそれを見て、「これはもうやっただはずなのに」「もう出来上がっていたと思ったのに」と考えますが、また最初から飾りを作り始めます。そのうちにまた火が消えて、彼女は立ち上がって薪をくべにいきます。すると犬が飾りをかみちぎってしまいます。そしてこれが際限なく繰り返されます。

しかし、この物語によると、老女が衣服の飾りを完成させてしまえば世界に終わりが来るのです。それがこの物語の「世界に決して終わりは来ない」という題名の由来です。「世界に決して終わりは来ない」。それは犬が彼女の作ったものを非常に効率よく壊してしまうからです。



Image by Troyd Geist, courtesy of the North Dakota Council on the Arts

ノースダコタ州のスタンディング・ロック・インディアン保留地に立つウィルソンと飼犬のサバ（ダコタ語で「黒」）

問：ウィルソンさんはシッティング・ブル・カレッジで教えることによってダコタ文化を保存していますが、ほかには何を教えていますか。

ウィルソン：アメリカ先住民の女性学を教えています。その授業ではアメリカ先住民女性が書いたものを使って、西洋人との初めての接触の時から今日までの間に女性の地位が変化してきた歴史を取り上げています。

問：なぜ口承文学が文化の保存の重要な要素なのでしょう。

ウィルソン：それは人間としての私たちの状況を教えてくれるものだからです。私たちが何かを保存するのは、単にそれがきれいだから、気に入ったからというだけではありません。自分たちの文明を向上させるようなものを保存しようとするのだと思います。ダコタ族はそれを実行してきました。しかし、それを継続するのが非常に難しくなっています。私たちの文化の中でほかに保存すべきもっと重要なものがあると考えられる人もいます。しかし口承文学が重要なのは、こうした物語が人間としての自分自身を理解するきっかけとなるからです。

詳しくは以下のウェブサイトを参照。

[http://www.nd.gov/arts/whatsnew/publications\\_recordings.html](http://www.nd.gov/arts/whatsnew/publications_recordings.html)

<http://www.nea.gov/honors/heritage/index.html>

<http://www.nea.gov/pub/pubFolk.php>

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# マルチリンガルであること

米国にきた移民は、母語を保つことと英語を学ぶことの間で挟まれてストレスを感じることもある。これはそうした移民の子どもたちの世代にも見られる。以下は、米国民がこの難題にどう取り組んできたか、またそれについての考え方がどのように変わってきたかということに関する、さまざまな人たちの言葉である。

「全ての子どもが2言語以上の言葉を読めるようにすべきである。……外国語を読めるということは……強力なツールとなる」

—— バラク・オバマ米国大統領。2008年の大統領選挙運動中の演説。

「スペイン語は私にとって個人的な言語だった。……私が学校の教室に入るとき、先生がスペイン語で話しかけてくれたならば、私の不安はずっと小さくなっていただろう。……しかし一方で、私は一般社会の言語を学ぶことを、もっと遅らせていただろう。……しかし私には英語が私の話す言葉だとは考えられなかった」

—— エッセイスト、リチャード・ロドリゲス。両親の母語であるスペイン語を話すことと英語を学ぶことの間で体験した緊張感について。

出典：Rodriguez, Richard. *The Hunger for Memory: The Education of Richard Rodriguez, an Autobiography*. New York: The Dial Press, 1982, p. 19.

「……私が子どものころ、母の『限られた』英語力によって、母についての私の認識も限られたものとなっていた。彼女の話す英語が、彼女の言いたいことの質を反映していると考えていたのである。……後に私は、小説を書くときに特定の読者を想定すべきだと考えた。そしてそれは母親たちを題材とする小説だったので、私の母をその読者に想定した……。私は彼女の内的言語を……想像し、その本質的なものを維持しようとした……」

—— 作家エイミー・タン。中国から移民してきた母についての子ども時代のタンの認識と、「ジョイ・ラック・クラブ」を書いたときにそ

の認識がどのように変化したかということについて。

出典：Tan, Amy, 「Mother Tongue」。初出は「Under Western Eyes」として *Threepenny Review* (1990, pp. 315-320) に掲載。

「『継承言語』という言葉は、地域社会における優勢な言語とは別に家庭で学ばれる言語のことであり……。継承言語を学んだ子どもは、それによって後に学問、職業、あるいはビジネスの世界で有利な機会に恵まれる」

—— カリフォルニア大学サンディエゴ校継承言語プログラム・ホームページ。

<http://linguistics.ucsd.edu/language/heritage-languages.html>

「……外国からきた私たちのような多くの人々にとって、アメリカ英語のイディオムの難しさが、予想外の構文や意外なフレーズの変化を生んで、英語を豊かにし、それが私たち全員を豊かにしている例が多い」

—— エジプトから米国に移住したアルメニア系の詩人グレゴリー・ジャンキアン。移民社会が英語を形づくってきた過程について。

出典：Poet Celebrates Family Picnics and “Great Melting Pot” of Language, PBS News Hour (4 July 2007)

[http://www.pbs.org/newshour/bb/entertainment/july-dec07/picnic\\_07-04.html](http://www.pbs.org/newshour/bb/entertainment/july-dec07/picnic_07-04.html)

## 英語の中の外来語

英語には他の言語からの外来語が多い。その例を以下に挙げる。

### 英語の外来語

Armada (大艦隊)  
Bazaar (バザー)  
Chess (チェス)  
Deli / Delicatessen (デリ、デリカテッセン)  
Icon (アイコン)  
Shampoo (シャンプー)  
Tsunami (ツナミ)  
Wok (ウオック、中華鍋)

### 元の言語

スペイン語  
アラビア語  
ペルシャ語  
ドイツ語  
ロシア語  
ヒンディー語  
日本語  
中国語



# スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズ 「音の博物館」



Smithsonian Folkways Recordings

D・A・ソネボーン、メーガン・バナー・サザランド

© 2010 Smithsonian Institution

D・A・ソネボーン博士は、スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズの副ディレクター

メーガン・バナー・サザランド (2010年カレッジ・オブ・ウィリアム・アンド・メアリー音楽学部卒業) は、スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズの応用民族音楽学インターン

「……私のすべての財産を……ワシントンにスミソニアン協会という名の下に知識の増大と普及のための機関を設立するためにアメリカ合衆国に遺贈する……」

ジェームズ・スミソンの遺言状 (1829年10月23日)。

[<http://siarchives.si.edu/history/exhibits/documents/smithsonwill.htm>]

1846年に英国の科学者ジェームズ・スミソンの財産を寄付された米国連邦議会は、独立公益信託としてスミソニアン協会を設立した。今日、同協会は世界最大の国立博物館・研究施設となっている。知識の保存と普及という使命を追求するスミソニアン協会は、何百万点もの芸術品など、世界各地の文化と社会とアイデンティティーを有形・無形に表現するものを一般に公開している。

スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズは、音楽、話し言葉、詩、演劇、説明、自然音、人工音などを何万点も録音し、一般に公開している博物館である。1987年にスミソニアンは、独立系レコード会社フォークウェーズ・レコード・アンド・サービス・コーポレーションを、その創

(左) ジャズ・トランペット奏者のディジー・ギレスピー。スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズによって演奏が保存されている多くのミュージシャンの1人

© AP Images



フォークウェーズ・レコードを創設し、米国と世界の民族音楽の保存をライフワークとしたモーゼズ・アッシュ

Courtesy of Ralph Rinzler Folklife Archives and Collections, Smithsonian Institution, photo by Diana Davies

設者モーゼズ・アッシュの遺族から買収した。著名なイディッシュ語の文筆家の息子として生まれたアッシュは、あらゆる文化・芸術表現に深い関心と理解を抱いていた。そして、音楽や音がどのように私たちの本質的な人間性を伝えてくれるかを示すことに情熱を燃やしていた。彼は「人民の音楽」を高く評価し、人気のあるものより、時代を超えて残る不朽の録音作品を求めた。最終的なアルバム数は2,000点を超えたが、10年間に1枚しか売れないアルバムも、年間に何千枚も売れるアルバムも、廃盤にすることはなかった。アッシュは、録音された音という媒体を通じて、誰もが民族、言語、人種などの相違を超えて相互の文化理解を深めることができるかと信じていた。1948年にフォークウェーズ・レコードを創設して以来、彼は、世界中の学者や現地録音技術者、そして熱心なファンの大きな協力を得て、米国と世界各地の伝統音楽を集め、音の世界を記録していった。

20世紀後半に、多くの諸国で、国家的・文化的な誇りを促進・表現する運動の一環として、フォーク音楽が復活した。アッシュは、優れたフォークミュージシャンの音楽をスタジオでも録音したが、スタジオ外の、雑音の入ったフィールド

レコーディング（現地録音）を好むことも多かった。フォークウェーズ・レコードは、カナダのニューブランズウィックの小さな漁村から、コンゴの熱帯雨林の奥地にある部族の野営地まで、世界のへき地へ録音機材を持って出かけるコレクターによるアルバムを何枚も発売した。

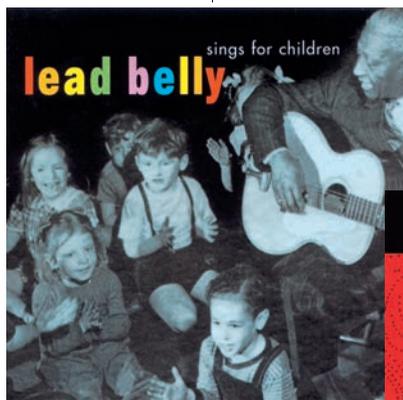
フォークウェーズのレコードは、聴く人たちにその音楽の文化的背景も理解してもらうために、詳しいライナーノート（解説書）が付いていることが多かった。それには写真、歌詞の翻訳、使われている楽器の説明、ミュージシャンの経歴、そして現地録音が行われた場所の歴史などが掲載されていた。フォークウェーズ・レコードは、現在ワールドミュージックと呼ばれている音楽に多大な影響を与えた。またアッシュは、教育に子どものための音楽を使うという点でも先駆者の役割を果たした。彼は、音楽が独創性と動きと異文化理解を促進するツールになると考えた。フォークウェーズ・レコードは、伝説的な米国のブルースミュージシャン、レッド・ベリーが歌う子どもの歌から、音の科学、そしてフレデリック・ダグラスの文章の朗読まで、子どもや青少年向けのフォーク音楽や文化的・歴史的に意義のある録音作品を制作した。

スミソニアン協会は、およそ四半世紀前にフォークウェーズ・レコードを買収して以来、フォークウェーズの全作品を一般市民が入手できるようにする、という約束を守ってきた。そして、当初のコレクションに加えて、地域社会を基盤とする音楽を出版し、他にも文化的に重要な独立系レコード会社やコレクションを買収した。それらには、コレクター、クック、ダイヤーベネット、ファスト・フォーク、モニター、M.O.R.E. (Minority Owned Record Enterprises)、パレドン・レコードなどがある。また、スミソニアン・フォークウェーズは、アーティストが自分の音楽の録音から利益を得る権利を支援することにも力を入れてきた。従来、売れたレコード1枚当たり数セント程度にすぎなかったアーティストへの印税を引き上げただけでなく、スミソニアン・フォークウェーズは、たとえ数ドルでも支払われるべき印税を受け取っていないアーティストがいれば、手間をかけても探し出して印税を払っている。

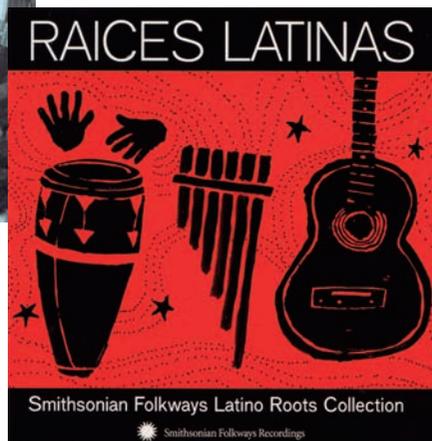
スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズは、さまざまな基準で録音の対象を選んでいる。特定のコレクションに欠けている部分があれば、資金を集め、アルバム1枚でも、録音のシリーズでも制作する。スミソニアン・フォークウェーズの使命に沿った録音を、音楽学者などの研究者、アーティスト、研究機関など第3者が提案することもある。保管されているコレクションの中から特定のアーティストの

作品を再発行したり、特定のジャンルの作品を集めて再発行したりすることもある。その場合は必ずリマスター版を作り、ライナーノーツやパッケージを新しくする。

スミソニアン・フォークウェーズのコレクションは、全てオリジナルの録音、アルバム、芸術作品、文書であり、録音に関連する事業記録や通信記録などと共に、適度な温度と湿度に保った保管所に保存されている。全ての作品をデジタル化することによって、スミソニアン・フォークウェーズ・レコーディングズは、



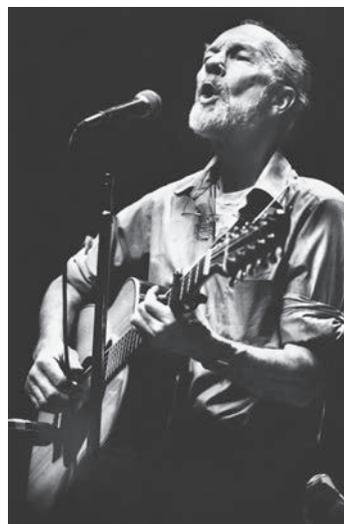
スミソニアン・フォークウェーズは、米国のブルースミュージシャン、レッド・ベリーが歌う子どもの歌のアルバム（上）、中南米をルーツとする音楽（右）など、さまざまなジャンルのアルバムを制作している



Courtesy of Ralph Rinzler Folklife Archives and Collections, Smithsonian Institution (for both album covers)

保管されているあ

らゆる作品をオンラインで一般公開するとともに、組織内のオンデマンド・フルフィルメントサービスでCDまたはカセットテープを1つずつ作ることができる。スミソニアン・フォークウェーズは、「音の博物館」として、世界中の文化が生んだ音楽と音を聴き、学び、鑑賞する手段を提供し、それによって米国その他の人々の文化と伝統に関する知識を広げ普及させることを目指している。



© AP Images/Mark Costantini

ビート・シーガーは、フォークウェーズ・レコーディングズが録音を保存している米国の数々のフォークシンガーの1人である

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

スミソニアン・フォークウェイズ・レコーディングズのアーカイブから音楽ストリームのサンプルを [http://www.america.gov/cultural\\_heritage.html](http://www.america.gov/cultural_heritage.html) で聴くことができる。



## 詳細は次のウェブサイトを参照

### Smithsonian Folkways Recordings

<http://www.folkways.si.edu/>

本稿で挙げられた独立系レコード会社、コレクション、アルバム

レッド・ベリー

<http://www.folkways.si.edu/albumdetails.aspx?itemid=2528>

音の科学

<http://www.folkways.si.edu/albumdetails.aspx?itemid=1092>

フレデリック・ダグラスの文章の朗読

<http://www.folkways.si.edu/albumdetails.aspx?itemid=1037>

コレクター

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/Collector.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/Collector.aspx)

クック

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/Cook.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/Cook.aspx)

ダイヤーベネット

<http://folkways-beta.si.edu/listen2.aspx?type=preview&trackid=48536>

ファスト・フォーク

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/FastFolk.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/FastFolk.aspx)

モニター

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/Monitor.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/Monitor.aspx)

M.O.R.E.

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/MORE.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/MORE.aspx)

パレドン

[http://www.folkways.si.edu/find\\_recordings/Paredon.aspx](http://www.folkways.si.edu/find_recordings/Paredon.aspx)

# ガーナの伝統音楽を ドラムで表現するカップル

ガーナのガ族グループの著名なドラマー、ヤクブ・アディは、1982年にガーナ音楽の演奏グループ「オダッダ！」を創設した。「オダッダ！」のマネジャー兼プロデューサーを務める妻アミナ・アディと共に米国に在住。ニューヨーク州サラトガスプリングズ市のスキッドモア・カレッジでドラムを教えている。2010年には、全米芸術基金の国家遺産特別研究員に選ばれた。

問：ガ族の音楽について説明してください。どのような楽器を使うのですか。またどのようなテーマがあるのですか。

ヤクブ・アディ：ソーシャルミュージックでは、いちばん初めにベルで拍子を取ります。次にサポートドラム、そしてその後でマスタードラムが加わります。曲をリードするのはマスタードラムです。

アミナ・アディ：特にソーシャルミュージックでは、マスタードラムは決まったパートを演奏してから即興で好きなように演奏することができます。そしてリードシンガーと、それに応えるリスポンダーがいますが、リードシンガーもかなり即興で歌うことができます。

祈禱（きとう）師のための音楽ではドラムが祈禱師の精霊を呼び出します。ガ族の文化を統制しているのは、世俗的なリーダーと宗教的なリーダーで、そのウロモと呼ばれる宗教的なリーダーたちの下に祈禱（きとう）師がいます。

また、ガ族の王室の音楽があります。例えば王様が歩くときに使われる音楽、そしてドラムによる言葉で語る詩があります。これは王様の生涯などの物語をドラムで表現するものです。そして3つ目がソーシャルミュージックですが、これは純粋に楽しむための音楽で、恐らくいちばん人気のある音楽でしょう。これは、あらゆるイベントで使われる音楽です。

問：なぜ米国に来ることにしたのですか。また、ガ族の音楽の保存にどのように貢献していますか。

ヤクブ・アディ：ガーナでは伝統音楽への支援がありませんでした。

アミナ・アディ：ガーナでは現代音楽をやっていればそれで生計を立てることができるかもしれませんが。しかしガーナの伝統音楽への援助はあまりなく、伝統音楽のミュージシャンがそれで食べていくことはできません。1960年代にヤクブが、

ガ族の音楽の保存のために、5つの基本的なドラム演奏技術から成るシステムを作りました。これはそれぞれはっきりした特徴を持つ5つのトーンを出すもので、それぞれにいくつものバリエーションがあります。ヤクブがそれを実際を使ってみたのは1970年代に初めて米国太平洋岸北西部に来たときでしたが、その後全米各地の大学で教えながら、このシステムを拡大していきました。

問：これまでに「オダッダ！」はどこで公演をしていますか。またこのグループがガ族の音楽の保存にどのような影響を及ぼしてきたと思いますか。

アミナ・アディ：主に米国で公演していますが、カナダでも多少活動しています。プエルトリコにも行きました。日本でも1度ツアーをしました。グループの影響についてですが、第1に、米国の人たちにガーナの文化を紹介したことが挙げられると思います。私たちが「オダッダ！」を始めるまで、ガ族の人々のことは知られていませんでした。「オダッダ！」を始めたのは1982年でしたが、私たちの知る限り、アフリカ人だけの演奏グループで米国を本拠としているのは私たちだけです。

ヤクブ・アディ：以前は米国に住むガーナ人の中には自国の文化を恥じる人たちもいました。しかし「オダッダ！」がそれを変えたのです。

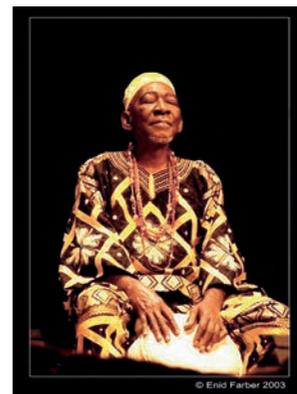
詳しくは以下のウェブサイトを参照。

<http://www.yacubaddy.com/odadaa.html>

<http://www.nea.gov/honors/heritage/index.html>

<http://www.nea.gov/pub/pubFolk>

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。



ヤクブ・アディ

© Erik Farber

# 世界の文化の保存

## 文化保存のための米国大使基金

「文化保存のための米国大使基金」は、世界各地の文化遺産保存プロジェクトに助成金を提供することによって全世界の文化の保護に貢献している。その多様なプロジェクトについては以下のウェブサイトを参照。



米州各地の文化保護

<http://www.america.gov/esp/patrimonio.html>



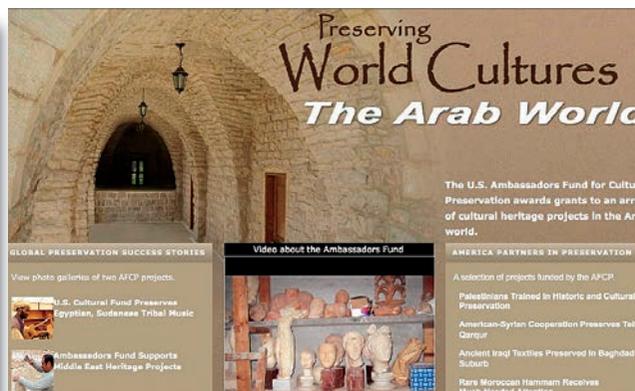
東南アジア・中央アジアの文化保護

[http://www.america.gov/preserving\\_culture-sca.html](http://www.america.gov/preserving_culture-sca.html)



ヨーロッパの文化保護

[http://www.america.gov/preserving\\_world\\_cultures.html](http://www.america.gov/preserving_world_cultures.html)



アラブ世界の文化保護

[http://www.america.gov/preserving\\_culture-mena.html](http://www.america.gov/preserving_culture-mena.html)

アフリカおよび東南アジアにおける文化保存のための米国大使基金についての詳細は、以下のウェブサイトを参照。

<http://go.usa.gov/Ca7>

<http://go.usa.gov/Cao>

<http://go.usa.gov/CaH>



# 世界の舞踊を支える地域のフェスティバル

マイケル・ギャラント



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

ヒップホップ、アフリカン、モダン、そしてジャズ・ダンスの要素を取り入れたダンスアンサンブル「イマニズ・ドリーム」

マイケル・ギャラントはギャラント・ミュージック (gal-lantmusic.com) の創設者で最高経営責任者。サンフランシスコ市に住んだ後、現在はニューヨーク市在住

美しいなだらかな丘陵、有名なゴールデンゲート・ブリッジ、絵のようにきれいな海岸の景色、そして豊かな文化の歴史で知られるカリフォルニア州サンフランシスコ市には、毎年何百万人もの観光客が訪れる。しかしサンフランシスコにはもうひとつ、最近急速に知名度を上げている要素がある。それはサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルである。

サンフランシスコには多様性に富んだユニークなダンスコミュニティがある。非営利団体ワールド・アーツ・ウエストが創設し毎年6月に開催されるサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルでは、地元の優秀な民族舞踊団がそれぞれ素

(左) メキシコ 200 年祭を祝うサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルでの公演

Courtesy of World Arts West, photo RJ Muna

晴らしいパフォーマンスを披露している。このフェスティバルは、多くの珍しい舞踊を紹介するだけでなく、そうした舞踊の伝統を積極的に保存し、米国内および世界各地での存続に貢献する役割も果たしている。

## フェスティバルの創設

「ここには他に比類のないダンスコミュニティがあると思います」とワールド・アーツ・ウエストの事務局長ジュリー・マッシュットは言う。「私たちは、サンフランシスコ・ベイエリア都市圏の 400 を上回る数の舞踊団と協力していますが、世界各地の 100 種類を超える伝統舞踊を維持しているダンサーの数は優に 2 万人を超えるでしょう」

それだけのダンサーの中からフェスティバルの出場者を選ぶのは容易なことではない。フェスティバルのプロデューサーたちは、カリフォルニア州北部のダンサーだけを対象にオーディションを行う。選考過程は厳しく、ダンスのオーディションのほかに、各自のダンスの由来となっている伝統文化

に関する小論文審査もある。専門家のパネルが、舞台での存在感、舞踊の文化的起源から見ての適切性などさまざまな基準に沿って応募者を審査する。競争率は非常に高く、2010年のフェスティバルでは、137回のオーディションにより応募者2,500人の中から最終的にはおよそ600人が選ばれ、37回の公演を行った。

2010年のフェスティバルでは、世界各地の文化が表現された。ある晩の公演の呼び物は、インド、ハイチ、ペルー、タヒチ、インドネシア、スペイン、日本の伝統舞踊にそれぞれ

ストがスポンサーとなって世界各地からのゲストアーティストの参加を奨励しているため、フェスティバルの影響は何千マイルも離れた地域社会にも及んでいる。「フィリピンのパラワン島から来たイスラム教の部族長は、このフェスティバルに参加するまで故郷の島から1度も出たことがなかったそうです。その何年も前にサンフランシスコのダンサー2人がパラワンを訪れ、現地の舞踊を学んで、サンフランシスコの舞踊団に教えました。その人たちが部族長をゲストアーティ



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

ハイチの儀式舞踊「シンビ・ドロ（水の女神）」を踊るアタイ・ダンス・カンパニー

れ専念する舞踊団であった。その数年前には、めったに見られないバリ島のガムラン「ジェゴグ」の公演もあった。これは竹でできた巨大なマリンバのアンサンブルで、演奏者は楽器に登って演奏しなければならない。

マッシュット事務局長は、このように多様な伝統舞

踊を1回の公演の中で紹介するのが好きだと言う。「スペインのフラメンコが目当てで来た人が、別の国の、ほかでは決して見られないようなダンスを見てほれ込んでしまうこともあります」

### サンフランシスコ以外の地域の民族舞踊

サンフランシスコ民族舞踊フェスティバルは地元の舞踊団を対象としているが、特に最近ではワールド・アーツ・ウエ



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

中国四川省のチャン族の踊りを起源とする舞踊。写真はハイ・ヤン・ジャクソン・ダンス・カンパニーのダンサー



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

和太鼓演奏には踊りの要素が入っている。写真は演奏する Jun Daiko（巡太鼓）のメンバー

ストとしてフェスティバルに招いたのです。この舞踊団の公演は3,000人の観客を集め、3回のショーの切符はすべて売り切れました」とマッシュット事務局長は語る。

「部族長は、舞踊団の公演を全部ビデオに収め、パラ

ワンに戻ってから部族の人たちに見せました。それは革新的な効果がありました。それまでパラワンの子もたちが米国について持っていた知識は、あまり質の良くない米国映画によるものでした。それは部族の指導層にとっては非常に気がかりなことでした」。フェスティバルの公演ビデオは、パラワンの子もたちの間に米国への関心を新たに引き立て、また自分たちの文化がフィリピンから遠く離れた国でも評価されていることを示したのである。そうした認識が、「地元の文化を維持する部族長の能力に大きな変化をもたらした

のです」と事務局長は言う。

このフェスティバルは、伝統舞踊の様式を守り伝えることを目的としているが、フェスティバルのステージでは革新的なダンスも見ることができる。「伝統の様式を大きく変えている人たちもいます。それには賛否両論があるでしょうが、長年の実績を持つベテランには、そういう試みを成功させるだけの信頼性があります」とマシエット事務局長は言う。

最近の例では、カンボジアの王立プノンペン大学で教えた後、1993年米国に移住したチャリヤ・バートがいる。マ



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

ウズベキスタンとウイグルのダンスを踊るタラ・キャサリン・パンデヤと、ウズベキスタンの打楽器を演奏するアボス・コシモフ

シエット事務局長はこう語る。「3年前、彼女は舞台の袖で不安そうに出演を待っていました。彼女の知る限り、カンボジアのダンサーが歌いながら踊るのは2,500年の歴史の中でも初めてのことでした。彼女は本物の様式を損なうことをとても心配していました。しかしカンボジア系米国人としてバートさんはそれが自分の芸術的前進の次のステップだと考えたのです」(編集者注：チャリヤ・バートについては26頁を参照)

「観客の中で、この様式の大きな変更気がついた人はあまりいませんでしたが、カンボジア文化を知る人には、これは非常に大きな変化でした。それは『本物』ではありませんでしたが、素晴らしい芸術であることに変わりはなく、好評を博しました」

マシエット事務局長にとって民族舞踊の意義は、特定の様式あるいは伝統を超えたところにある。彼女は、「舞踊は人間の体験の中核を成すものです。3万年も前の洞窟壁画を見ると、何千年も何千年も繰り返し描かれているのは狩猟と『舞踊』です」と言う。

「舞踊は、人間の連帯感、豊かな生活に欠かせないものとなりました。このフェスティバルで紹介する舞踊様式は、

人々が集まって祝福し、哀悼し、スピリチュアルなつながりを築いた文化を背景に生まれたものです。こうした舞踊様式の知識には非常に多くのものを取り込まれ、伝えられているのです」

それぞれの舞踊様式に固有の文化と芸術性は、サンフランシスコ民族舞踊フェスティバルのようなイベントの重要性と必要性をさらに高めるものである。これらのフェスティバル



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

ブレイド・ダンス・シアターによるトルコの民族舞踊



Courtesy of World Arts West, photo by RJ Muna

ボリビア・コラソン・デ・アメリカが踊るこのダンスは、ボリビア・アンデス地域の先住民のアイmara文化とケチュア文化を発祥とする

のおかげで、舞踊の伝統がその発祥の地を遠く離れた土地でも鑑賞され、その結果さまざまな文化や文化表現の様式への理解と評価が高まっている。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# カリフォルニア州で生き続ける カンボジアの伝統舞踊

カリフォルニア州のサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルでチャリヤ・パートの踊りを見るために集まった大勢の米国人が舞台上で発見するのは、優美な動き、細部に至るまで正確なテクニック、そしてエレガントで華麗な衣装の全てを統合した楽しさだけではない。そこには、心をこめて保存されてきたカンボジア舞踊の世界と、その伝統の源となる豊かな文化を垣間見ることができる。

パートは、1993年にカンボジアから米国に移住し、カリフォルニア州北部でチャリヤ・パート・カンボジア舞踊団を結成した。舞踊団の芸術監督として彼女は、教えたり、公演やワークショップを行うことで、カンボジア舞踊を伝え、振興している。

カンボジアのプロンペン王立芸術大学舞踊学科で教えていたパートのダンスの教え方と公演は、カンボジア伝統舞踊の高度の専門知識と技能に支えられている。彼女は、「カンボジア舞踊の保存は私の大きな義務である。古典舞踊のレパートリーを再演し、古い舞踊の記録を残し、この伝統を次世代に引き継いでいる」とアーティストステートメントに書いている。

パートは、カンボジアで生まれた舞踊の真の姿を残しながらも、独自の要素を強調し、外からの影響を取り入れながら常に進化するオリジナルな作品を作り出している。「ビリア・チュラス・クニア（時間の交差点）」という作品は、外国で育ち、今は米国に住んで創作活動をするパート自身の芸術家としての人生からインスピレーションを得たものである。また「ブカ・コラブ・キーフ（青いバラ）」は、米国の劇作家テネシー・ウィリアムズの画期的な作品「ガラスの動物園」に登場する、優しいが孤独な女性ローラを深く表現した作品である。2007年のサンフランシスコ民族舞踊フェスティバルで「青いバラ」の世界初演を行ったパートは、伝統的なカンボジア衣装を着て、西洋の弦楽器とカンボジアの伝統楽器のアンサンブルの生演奏に合わせて踊った。

カンボジア舞踊の普及と保存と発展を目指すパートの活動は、引き続き米国で成功を収め、高く評価されている。彼女は10年以上にわたり、サンフランシスコ民族舞踊フェスティ

バルのレギュラー出演者として人気を集めている。また、イサドラ・ダンカン最優秀個人パフォーマンス賞を受賞したほか、カリフォルニア州伝統芸術連盟、クリエイティブ・ワーク基金など数々の団体から助成金を獲得している。2006年には、サンフランシスコ・クロニクル紙が、パートを「カンボジア古典舞踊の極めて優美な実践者」と称賛した。

パートが踊り、教えている精緻（せいち）で洗練された優雅なカンボジア古典舞踊の様式は、歴史的な深い意味を伴うものである。1,000年以上の歴史を持つカンボジア古典舞踊は、スピリチュアルな世界とつながっているものとして発展してきたもので、王室の儀式のために演じられることも多かった。しかし、ポル・ポトがカンボジアを支配した1975年から79年までは、古典舞踊の教育と実演が禁じられた。その後続いたクメール・ルージュによる集団虐殺で、音楽家、文筆家、舞踊家など大勢の芸術家が殺された。その期間にカンボジア古典舞踊はほとんど消滅してしまった。

パートは今も、彼女が身に付けてきた伝統が育ち花開くようにするための努力を続けている。第2の故郷であるカリフォルニア州から、彼女はグローバルな視点を取り入れた活

動をしている。「私は創造活動を通じて、古典舞踊と民族舞踊を発展させるとともに、音楽的にもテーマの上でも伝統的な様式の枠組みを超える革新的な作品を作ってきた。こうした舞踊は私の関心事や情熱を反映しているが、それだけではなく、あらゆる人々の関心事と情熱をも反映していることを願っている」とパートは書いている。

—— マイケル・ギャラント

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。



チャリヤ・パート

© Bonnie Kamin Morrissey

## 文化遺産を守る米国人

大都市でも小さなコミュニティでも、米国民は生活と祝賀を通じて、音楽、ダンス、その他の文化的表現を保存している。



© Getty Images/Alex Wong

ワシントン DC のスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルでオマーンの伝統音楽を演奏するオマーンの舞踊・音楽団アル・マジド・アンサンブル



© AP Images/Lynn Hermosa

テキサス州ブラウズビル市で毎年開催されるチャロ・デイス・フィエスタで演じられたメキシカンダンス。ブラウズビルはメキシコとの国境を越えたところにあるマタモロス市と提携して、この米国・メキシコ2カ国のフェスティバルを開催している



© AP Images/Houston Chronicle, Johnny Hanson

トリニダード・トバゴ共和国を発祥地とするスチールドラムを演奏する、テキサス州ヒューストン市マグレガー小学校スチーライト・オーケストラのメンバー



© AP Images/The Exponent Telegram, Paul Stephen

ウェストバージニア州のスコティッシュ・ヘリテージ・フェスティバル・アンド・ケルティック・ギャザリングでバグパイブを演奏するペンシルベニア州ピッツバーグ市のティーンエイジャー



2004年にハイチ独立200周年を祝ってニューヨーク市で踊るハイチのイボ・ダンサーズ



© AP Images/Bebeto Matthews

アメリカ先住民モヒカン族のミュージシャン、ビル・ミラーはインディアンフルートの名手として知られ、先住民音楽のアルバムを多数リリースしている

Courtesy of Katherine Fogden, NMAI, Smithsonian Institution



© AP Images/Robert Mecca

ニューヨーク市のリンカーン舞台芸術センターでイランのミュージカル「タジエ」を演じる俳優たち



© AP Images/Chitose Suzuki

聖パトリックデーを祝って踊るマサチューセッツ州ボストン市のウッズ・スクール・オブ・アイリッシュ・ダンスの子どもたち。マサチューセッツ州の住民の4分の1がアイルランド系である



© AP Images/The South Bend Tribune, Santiago Flores

インディアナ州のノートルダム大学で踊るルワンダの文化グループ「ベルワ」

Courtesy of Katherine Fogden, NMAI, Smithsonian Institution



(左) ワシントン DC の国立アメリカインディアン博物館でフラダンスを踊るホオマウ・イ・カ・ワイ・オ・ハワイのダンサーたち。バージニア州アレクサンドリア市を本拠とするこの舞踊団は、ハワイアンダンスも教えている



© AP Images/Michael Dwyer

マサチューセッツ州ボストン市のベトナム文化センターで開催されたフェスティバルでは、参加者がさまざまなベトナム料理を試食した



© AP Images/Reed Saxon

カリフォルニア州ロサンゼルス市で行われたロータス・フェスティバルでインド・ケララ州のダンスを踊るケララ・ダンス・シアターのダンサーたち。このフェスティバルでは、アジア太平洋諸島の文化表現を紹介している



© AP Images/Beth Schliker

自作の「物語の布」を展示するモン族の女性。タイの難民キャンプに住んでいたモン族の人々は、伝統的な物語を忘れないように「物語の布」を作り始めた



© AP Images/Daily Sun, B.J. Fictum

ネブラスカ州ウィルバー市で毎年開かれているウィルバー・チェコ・フェスティバルで踊るウィルバー・ジュニア・チェコ・ダンサーズのメンバー。この小さな町は、1865年にチェコ人の入植地として始まった

# 文化財の返還

## 2人の専門家による、美術・工芸品の 母国への返還の是非をめぐる討論

### マルコム・ベル3世



マルコム・ベル3世

Courtesy of Malcolm Bell, III, photo by Leslie Rahuba

マルコム・ベル3世は、バージニア大学マッキンタイア記念芸術学部名誉教授。専門はギリシャ美術考古学。シチリア島・モルガンティーナ発掘の共同ディレクター

通常、政府は、自国の文化を守り、外国の美術館・博物館や収集家による利己的な利用を防ぐために、工芸品や芸術作品の返還を主張する。ベル教授は、こうした主張の法律的・道徳的な正当性を説明する。

オックスフォード英語大辞典は、「repatriate（返還する）」とは「（工芸品あるいはその他の物体を）その原産国または原産地に戻すこと」であると定義し、返還とは元に戻すプロセスであると認識している。多くの工芸品や芸術作品には、特定の地域社会または国家にとって特別な文化的価値がある。これらの作品が当初の文化的環境から他へ移されると、作品はその背景を失い、文化はその歴史の一部を失う。

文化的工芸品は返還要求の対象となることが多い。通常、その直接の理由は、当該工芸品が生まれた国または地域社会が法律的または道徳的な見地から返還を要求するからである。返還に反対する人々は、そうした主張は国家主義的な目的によるものであるとして退けるが、返還を推進する人々は通常、政治的な見解とは切り離された合理的な理由で返還を正当化する。多くの国家は、国境内の下層土中または水中にある古代の遺物、工芸品、墓、および構造物で、偶然または発掘によって発見されるまで未知であったものは、国家の所有物であるとしている。ただし、米国はその限りではない。そのような所有権を宣言している国のほとんどは、過去に外国の博物館や収集家による自国の古代の遺物への需要によって搾取された体験を持つ。

### ジェームズ・クノー



ジェームズ・クノー

© AP Images / M. Spencer Green

ジェームズ・クノーは、シカゴ美術館館長、エロイーズ・W・マーティン記念ディレクター。著書に Who Owns Antiquity? Museums and the Battle over our Ancient Heritage (Princeton 2009) がある。

博物館を訪れる人たちに世界各地の多様な芸術作品を見る機会を提供することは、人々の探究心、寛容さ、そして幅広い知識を促進する。芸術的な創造物は、国境を超えるだけでなく、それを創り出した文化や民族をも超えるものである、とクノーは主張する。

米国の美術館は、所蔵する芸術作品を専門家として管理することに専心している。世界の数々の文化を代表する芸術作品を収蔵する博物館の館長や学芸員は、多様な芸術を見る機会を提供することによって、世界についての無知を消失させるとともに、文化の違いへの探究心と寛容さを促進することができると考えている。

これは、今日の都会化そしてグローバル化された世界においては特に重要なことである。例えば、私の生活と仕事の場であるシカゴ市は、2000年の国勢調査によると、住民の42%がヨーロッパ系、37%がアフリカ系である。外国生まれの市民の中では、ヒスパニック系の人々が最も大きな比率を占めている。また、シカゴの人口の中で最も急成長しているのもヒスパニック系である。シカゴは、全米で5番目に外国生まれの住民の多い都市であり、メキシコ系の人口では全米第2位、南アジア系の人口では全米第3位である。またシカゴは、ギリシャ系住民の人口では、全世界の都市中、第3位である。シカゴの人口のおよそ22%が外国生まれであり、その内訳は26を超える民族グループから成り、彼らの話す言語の数は40を上回る。シカゴ美術館は、世界各地の芸術



アテネ（ギリシャ）のアクロポリスの丘にあるパルテノン神殿（右端）の景観。パルテノンにあった大理石の彫像の多くはロンドンの大英博物館に収蔵されている。それらをギリシャに返還すべきかどうかについて多大な論争が起きている

© AP Images/Petros Giannakouris

原産国が所有権を要求することには、以下の2つの利点がある。

- 考古学的遺跡を破壊し、工芸品の機能的・歴史的な背景を奪ってしまう未許可の発掘を防ぐ。
- 不法に発掘された工芸品や美術品の輸出を防止する。

所有権を要求することによって、土中にある工芸品を守るとともに、発見後にはそれが国際的な取引・収集の世界へと消失してしまう可能性を抑えることができる。ほとんどの場合、こうした法的な所有権の要求が、返還要請の根拠となっている。

返還は国際的な法律および規範によって承認され成文化されている。1970年には、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の「文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止に関する条約」という、大変長い名前であるが極めて重要な条約が批准された。これは、盗まれた考古品の国際取引を防ぐためのものである。従って、1970年以降に、来歴のはっきりしない未登録の考古品を入手した者は、それが非合法である可能性を認識していた（はずである）。有名な博物館や収集家に対して、そうした考古品の原産国がその返還を強く要求してきており、この10年間にかなりの数の考古品が返還されている。

このように、工芸品の返還要請には通常、強力な法的根拠がある。その考古品は不法に輸出され、おそらく不法に発掘されたものであり、さらに最も重要な点として、現在米国の裁判所では盗品と見なされるのである。また、私的な財産権が大いに尊重される米国においてさえも、連邦政府所有地から出た考古品については政府が所有権を要求し、もしそれが私的に発掘・輸出された場合には返還を要請する、という点も注目に値する。

作品を偏見にとらわれずに展示することによって、見る人たちに、時間的にも空間的にも遠く離れた文化を紹介するだけでなく、特に最近の傾向として、すぐそばに住む人たちの文化を紹介している。

博物館は百科事典的であること、すなわち多くの異なる文化の芸術を展示することを目指すべきである。哲学者ポール・リクールは、「文化とは単一のものではなく複数の文化が存在するというを発見し、その結果として……文化的な独占の終えんを認識するとき……突如として、存在するのは『他者』のみであるという考え方、すなわち私たちも多くの『他者』の中の1つの『他者』にすぎないという考え方が可能になる」と述べているが、これは百科事典的な博物館について述べたものと言ってもよい記述である。百科事典的博物館は、このように異文化に光を当てるといった重要な目標の達成に専心している。

世界中どこでも、国家は文化財産を国家の財産と見なすことが多い。特定の国に存在する芸術は、共通の歴史のあるいは民族的ルーツによってその国につながっているとされ、その国家を他の国家と区別する、消えることのない存在であると考えられていることが多い。百科事典的な博物館は、多様な芸術作品を所蔵することによって、文化についてのこうした狭い定義に反論し、芸術を政治的な境界を超えたものとして見ることを促す。絵画、工芸品、音楽、舞踊などの芸術作品は、それを創り出した文化や民族を超越し、複数の異なる民族の歴史を相互に絡み合わせるものである。その例として、ギリシャの芸術が後のローマ、ガンダーラ、そして新古典派ヨーロッパの文化に及ぼした影響、またヒンズー教、仏教、およびペルシャ・イスラム教の絵画や詩や音楽がインド文化に及ぼした影響などが挙げられる。政治学者のロクサヌ・ユーベンは、世界を細分化して「明確な境界線によって区切られた均一的で識別可能な複数の主体に分け、各カテゴリー内の亀裂と相互の歴史的負債を消してしまうように世界を分割する」ことに警告を発したが、彼女の主張は正しい。



ロンドンの大英博物館に所蔵されているパルテノン神殿の大理石彫刻（エルギン・マールとも呼ばれる）の一部

Courtesy of Wikimedia Commons



State Dept

「Who's Right」 討論シリーズは、america.govに掲載されている  
[\[http://www.america.gov/whos\\_right\\_archives.html\]](http://www.america.gov/whos_right_archives.html)

「……完全性を回復することが、  
 工芸品……の返還の根本的かつ  
 真に正当な理由である。その意  
 味で、返還は正義の表現なので  
 ある」

—— マルコム・ベル

返還の正当性をさらに強化する新たな法律もある。米国では、1990年の「アメリカ先住民埋葬地保護・遺品返還法(NAGPRA)」により、連邦政府の博物館や所蔵施設は、アメリカ先住民の遺骨、埋葬品、および聖物をアメリカ先住民の部族に返還することが義務付けられた。その中には早くも19世紀中葉に発掘または収集されたものもある。NAGPRAは、民間の所有によるものや米国外の収集品には適用されないが、部族の文化あるいは民族国家にとって重要な物品を保有する海外の全ての機関に模範を示したことになる。その一例として、1897年に現在のナイジェリアで英国植民地当局が強奪したベニンのブロンズ像の素晴らしいコレクションが挙げられる。今日、世界各地の主要博物館に展示されているこの偉大なアフリカ芸術作品は、それが創作された地である近代民族国家の文化にとって極めて重要な欠かせない存在であり、いずれ返還される日が来るかもしれない。

返還を主張するその他の根拠としては、最近、作品自体に、(法的な権利に対して) 道徳的な権利があると考えられるようになってきたことが挙げられる。そうした権利の中には以下のものがある。

芸術と文化が厳密に特定の国家に結び付けられるとき、多くの異なる民族をつなぐ異文化間のきずなが失われる。

「芸術と文化が厳密に特定の  
 国家に結び付けられるとき、  
 多くの異なる民族をつなぐ異  
 文化間のきずなが失われる」

—— ジェームズ・クノー

米国の美術館は、国内外で適用される全ての法律・条約を順守した上で、百科事典的なコレクションを築くことを目指している。作品を入手する際には、必ずその法的な状況を調査する。例えば、その作品がどこで作られたのか、海外の作品なら、いつ輸出されたのか、最近の所有者は誰か、といった点を調べる。その作品の瑕疵のない所有権が得られることを確認しなければならない。万一、後から所蔵品が不法に輸出されたものであることが判明した場合には、その作品を返還する倫理的・法的な義務がある。

しかし、たとえ合法的に入手した芸術作品であっても、「母国」に返還すべきであると主張する人々もいる。彼らの主張

によると、これらの作品はその母国にとって意味のあるものであり、その国と国民のアイデンティティーと自尊心に重要な意味を持つものであるから、その国に当然の所有権がある。これは歴史を書き換える考え方である。どこで線を引くべきなのだろうか。歴史は長く、明確に線を引けるものではない。今日の特定の民族国家の領土が、過去には異なる政治主体に属し、そこには異なる人種が住んでいた可能性も高い。例えば、広大なアフロ・ユーラシア世界では、古代アッシリア、エジプト、



© AP Images / J. Paul Getty Trust, Bob Riha, Jr.

イタリアで創られた古代ローマの大大理石像「大ファウスティナ」。現在はロサンゼルスに近いゲティ・ピラのJ・ポール・ゲティ美術館に展示されている

- 存続の権利。ここで思い出されるのは、2001年にタリバンによって意図的に破壊されたアフガニスタンのバミヤンの大石仏の悲劇的なケースである。
- 適切な保存の権利。
- 関連する歴史的文献または考古学的文献の保存の権利。
- 公共のアクセスの権利。
- 作品が断片状態で存在する場合の統合の権利。

この最後の権利、すなわち完全性の権利は、返還に際して重要になることがあり、返還とは回復の1つの形であるということを変更して考えさせてくれる。世界各地の博物館に、破片として分かれて収蔵されている作品は、1つの完全な作品の各要素とみなされ理解されるべきものである。古代ギリシャ人にとって彫像は、そのモデルとなった人間に仮想の生命を与えるものであった。従って、具象的な芸術作品においては完全性が不可欠な要素の1つであった。分割されている考古品の中には、賢明な互恵的交換によって完全性を回復できるものが多数存在する。その最も顕著な例が、古典考古品の最高峰であるアテネのアクロポリスのアテナ神殿、すなわちパルテノン神殿である。この神殿の構成要素（ラテン語で *disiecta membra*）は各地に分散している。パルテノン神殿にあった大理石の彫像の多くは、1803年に英国人に持ち去られ、現在では大英博物館に収蔵されている。その他の博物館が所蔵する彫像もいくつかある。政治的、経済的、あるいは法定的見地から、パルテノンの彫像を全てギリシャに返還することを主張する意見は多いが、中でも最も強力な根拠となるのは、この偉大な神殿自体の完全性を回復させるべきだという主張である。パルテノンの彫像を返還する理由として、これ以上に良い理由はない。部族の文化であれ偉大な芸術作品であれ、その完全性を回復することが、工芸品や考古品の返還の根本的かつ真に正当な理由である。その意味で、返還は正義の表現なのである。

---

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

ペルシャ、ギリシャ、ローマ、インドのムガル帝国から近代のポルトガル、フランス、英国など、3,500年以上にわたり数々の帝国が拡張と縮小、台頭と衰退を繰り返してきた。かつてはギリシャ帝国のはずれにあり、現在はアフガニスタンとなっている地域で創られ発見されたヘレニズム芸術作品は、ギリシャのものなのか、それともアフガニスタンのものなのだろうか。あるいは、現在カブール国立博物館が所蔵するエジプトガラスやインド・ペルシャ・ギリシャの影響を示すバグラム出土の象牙は、現代のどの国家に所属するのか。芸術・文化の所有権を示す境界線は明確ではない。

分散されている芸術作品を元の形に戻すために返還を求める意見もある。しかし、その場合も、どこで線を引くかが問題となる。また、分散された作品を1つにまとめるにしても、どこにまとめるのか。例えば、大きな祭壇画の各部分や群像の中の個々の彫像を所蔵している複数の国、都市、博物館のうち、どこが、まとめた作品全体の「本拠地」となるのか。

私は、法律の範囲内で、どの国の博物館も、世界の多種多様な文化を代表する芸術作品を所蔵することを奨励されるべきであると考え。その手段としては、購入、長期貸し出し、世界各地の博物館あるいは政府との協力などが考えられる。そのようなコレクションは、洗練された世界観と、文化の流動性についての歴史的に正確な理解を促進するものである。

インドの経済史学者サンジェイ・スプラマニウムは、「……自国の文化も、他のあらゆる国家の文化と同様、ハイブリッドであり、さまざまな文化の交差したものであり、偶然の出会いや予想外の結果から生まれた諸要素の混合物である、ということ宣言するだけの自信を持たない国家の文化は、排外主義と文化的パラノイアへの道を進むしかない」と書いている。そして、私たちが今住んでいる世界と時代において、そうした危険な傾向に対処するうえで、百科事典的な博物館が重要な役割を果たし得るのである。

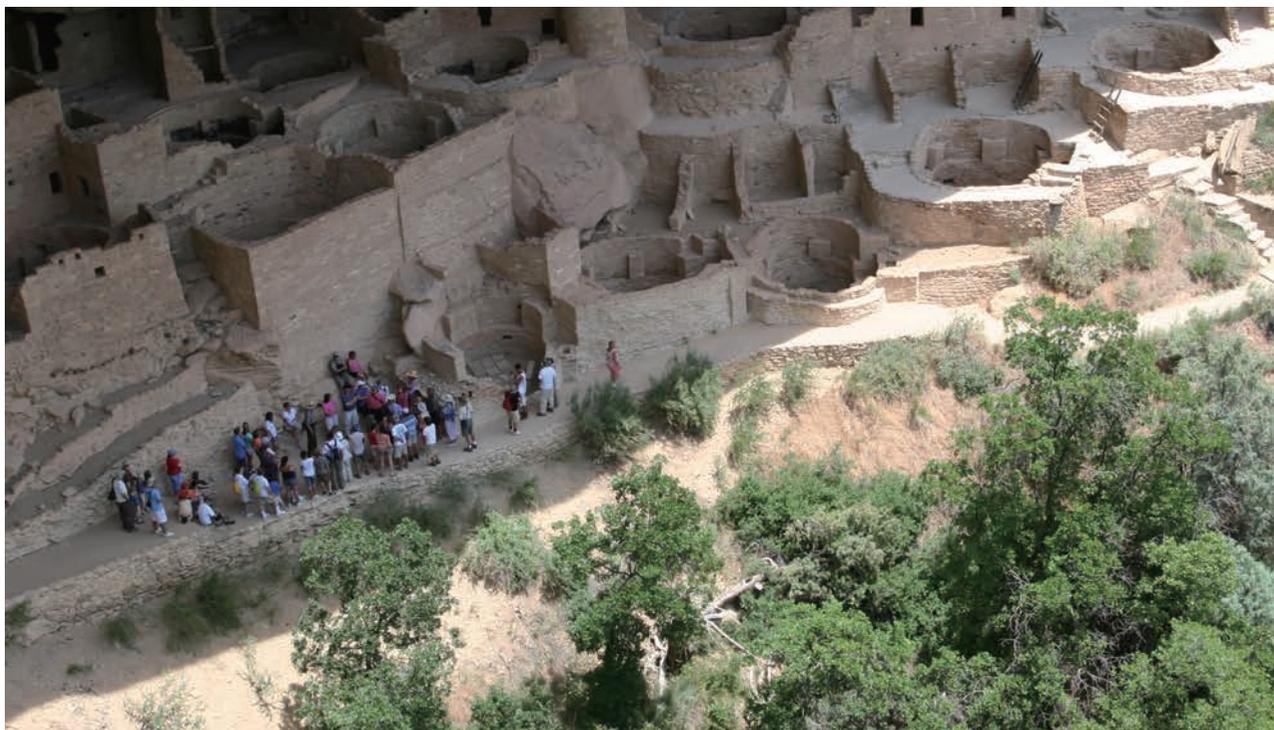
---

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# 米国の保護法

## 文化遺産保護の法的枠組み

パティ・ガーステンブリス



Courtesy of Wikimedia Commons, photo by Massimo Catarinella, 2008

プエブロ族の先祖が住んでいたコロラド州のメサベルデは、今日では米国の国立公園となっている

パティ・ガーステンブリスは、デュポール大学法学部特別研究教授兼同大学芸術・博物館・文化遺産法センター所長

米国には、文化的・知的作品を創造する人々の権利を保護する極めて多くの法律が存在する。これには、彫刻、建築物などの有形の作品から、音楽、舞踊など、想像力の産物でそれほど形がはっきりしていない作品まで、さまざまなものが含まれる。これらの法律は、そうした作品を未来の世代のために保存する枠組みも確立するものでもある。

### 米国における有形文化の保存

・1906年遺跡保存法：「史跡、歴史的および先史時代の構造物、その他歴史的または科学的に関心のあるもの」を、保護の対象となる国定記念物に指定する権限を米国大統領に与えた。

・国立公園局：1916年に設置された国立公園局は、全米各地の多種多様な天然および人工の地域を保護している。同局の活動により、米国には世界有数の広大かつ保護の行き届いた国立公園が各地に存在する。その中には、ワイオミング州のイエローストーン国立公園やカリフォルニア州のヨセミテ国立公園のような天然の地域や、コロラド州のメサベルデ国立公園のような人工の遺跡がある。

・1966年国家歴史保存法：同法は、国家史跡登録制度を確立し、米国の歴史、建築、考古学、および文化において重要な建物や歴史地区その他の地域に影響を及ぼす開発・工事を制限している。

・1979年考古学的資源保護法：連邦政府所有地内にある工芸品および考古学的地域を保護するために、発掘および工芸品の移動には許可の取得を義務付けている。

・1990年アメリカ先住民埋葬地保護・遺品返還法：1990年に降に連邦政府所有地または同管理地で発見された遺骨および関連埋葬工芸品を、アメリカ先住民部族やハワイ先住民組織に返還することを規定している。この法律は、宗教的な慣習で使われる工芸品を保護することによって、無形の文化的価値観および伝統の保存にも貢献している。

## 世界の文化を保護する米国の法律

米国は、世界の文化を保護する以下のような国際的な活動に参加している。

・1983年文化財条約実施法：1970年の国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の「文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止に関する条約」の米国による批准を実施する法律。1983年の法律は、外国の博物館から、またはその他の宗教的・非宗教的機関から盗まれた文化財を米国に輸入することを禁じている。また、米国大統領が米 국무省を通じて、250年以上前の「文化的重要性を持つ」考古品、ならびに“希少および文化的に重要”な民俗学的資料、または“希少”もしくは“文化的に重要”な民俗学的資料の米国への輸入を制限する権限を認めている。

・1966年国家歴史保存法：この法律の一部は、1972年のユネスコ世界遺産条約を実施するために、米国政府の支援する海外における建設工事について、文化遺産地域への悪影響の可能性の評価と緩和を必要条件にしている。

・文化保存のための米国大使基金：米国内務省が運営するこの基金は、米国の大使に、資金援助の対象となる文化保存プロジェクトを推薦する権限を与えている。過去10年間におよそ100カ国で640件を超えるプロジェクトを追加した。同基金によるプロジェクトには、歴史建造物の修復、博物館所蔵品の保存、伝統工芸技術や音楽・先住民言語など民間伝承の記録などがある。

## 米国における無形文化の保護

米国連邦政府は、無形文化財の保存を目的とするイニシアチブも開始している。

・アメリカン・フォークソング記録保管所：1928年に連邦議会図書館の一部門として設立された。1890年代から現代までに作られた米国の音楽を収集・記録している。1978年に、アメリカン・フォークライフ・センターの一部門となった。

・連邦議会図書館のアメリカン・フォークライフ・センター：連邦議会により1976年に設立されたこのセンターは、



Courtesy of Library of Congress, Prints & Photographs Division, Lomax Collection

米国連邦議会アメリカン・フォークソング記録保管所（アメリカン・フォークライフ・センターに所属）では、1928年以来、米国のフォーク音楽の保存に努めてきた。写真は、1935年当時の米国のフォークミュージシャン、ガブリエル・ブラウンとロシェル・フレンチ

「言語、文学、芸術、建築、音楽、戯曲、舞踊、演劇、儀式、式典、手工芸品」など有形・無形の文化を保存している。また、アメリカ先住民の歌やダンス、英国のバラッド、元奴隷の体験談、米国各地の方言で語られた物語など、多様な地域・民族の音声や音楽も保存している。

・全米芸術基金：連邦政府の独立機関として1965年に設立された全米芸術基金は、視覚芸術、音楽、舞踊、口承文学などさまざまな文化表現形式を奨励し保存するために、芸術家など創作活動に従事する人たちに助成金を提供している。

本稿に示された意見は、米国政府の見解または政策を必ずしも反映するものではない。

# 参考資料

## 文化遺産保存に関する出版物・ウェブサイト

### 書籍・記事

**Carlton, Jim.** “In Alaska, a Frenchman Fights to Revive the Eyak’s Dead Tongue.” *Wall Street Journal* (10 August 2010)  
<http://online.wsj.com/article/SB10001424052748704499604575407862950503190.htm>

**Cuno, James, ed.** *Whose Culture? The Promise of Museums and the Debate Over Antiquities*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2009.

**Gates, Pamela S. and Dianne L. Hall Mark.** *Cultural Journeys: Multicultural Literature for Children and Young Adults*. Lanham, MD: Scarecrow Press, 2006.

**Gerstenblith, Patty.** *Art, Cultural Heritage, and the Law: Cases and Materials*. 2nd ed. Durham, NC: Carolina Academic Press, 2008.

**Hogan, John P., ed.** *Cultural Identity, Pluralism, and Globalization*. Washington, DC: Council for Research in Values and Philosophy, 2005.

**Hopkins, Kyle.** “Extinct Alaska Native Language Interests French Student.” *Anchorage Daily News* (29 June 2010)  
<http://www.adn.com/2010/06/27/1343777/unlikely-passion-may-save-eyak.html>

**McLean, George F.** *Persons, Peoples, and Cultures: Living Together in a Global Age*. Washington, DC: Council for Research in Values and Philosophy, 2004.

**Regier, Willis G., ed.** *Masterpieces of American Indian Literature*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2005.

**Roberts, Sam.** “Listening to (and Saving) the World’s Languages.” *New York Times* (28 April 2010).  
<http://www.nytimes.com/2010/04/29/nyregion/29lost.html?pagewanted=all>

**Robinson, Matt.** “Preservation Hall Links Past With the Present.” *Travel Weekly* (December 7, 2007)  
[http://www.travelweekly.com/article3\\_ektid117098.aspx?terms=\\*preservation+hall\\*](http://www.travelweekly.com/article3_ektid117098.aspx?terms=*preservation+hall*)

**Smith, Laurajane and Natsuko Akagawa, eds.** *Intangible Heritage*. London; New York: Routledge, 2009.

**Sweet, William, ed.** *The Dialogue of Cultural Traditions: Global Perspective*. Washington, DC: Council for Research in Values and Philosophy, 2008.

### ウェブサイト

米国政府

全米芸術基金  
**National Endowment for the Arts**  
<http://www.nea.gov>

国立公園局  
**National Park Service**  
<http://www.nps.gov>

米国国務省  
文化保存のための米国大使基金  
**U.S. Department of State  
Ambassadors Fund for Cultural Preservation**  
<http://exchanges.state.gov/heritage/afcp.html>

米国連邦議会図書館  
アメリカン・フォークライフ・センター  
**U.S. Library of Congress  
American Folklife Center**  
<http://www.loc.gov/folklife>

米国連邦議会図書館  
ナショナル・ブック・フェスティバル  
**U.S. Library of Congress  
National Book Festival**  
<http://www.loc.gov/bookfest/>

### 国際機関

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）「文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡の禁止及び防止に関する条約（1970）」  
**United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) Convention on the Means of Prohibiting and Preventing the Illicit Import, Export and Transfer of Ownership of Cultural Property (1970)**  
[http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL\\_ID=13039&URL\\_DO=DO\\_TOPIC&URL\\_SECTION=201.html](http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=13039&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html)

ユネスコ無形文化遺産  
**UNESCO Intangible Cultural Heritage**  
<http://www.unesco.org/culture/ich/>

ユネスコ世界文化遺産  
**UNESCO World Cultural Heritage**  
<http://whc.unesco.org>

#### 研究機関・支援組織

インディアナ大学伝統音楽記録保管  
**Archives of Traditional Music — Indiana University**  
<http://www.indiana.edu/~libarchm/>

コア・オブ・カルチャー（舞踊の保存）  
**Core of Culture (preserving dance)**  
<http://www.coreofculture.org/>

ブレス・オブ・ライフ・ワークショップ（カリフォルニア州  
先住民言語の保存）  
**Breath of Life Workshop (preserving indigenous Cali-  
fornia languages)**  
[http://linguistics.berkeley.edu/~survey/activities/breath-of-  
life.php](http://linguistics.berkeley.edu/~survey/activities/breath-of-life.php)

危機言語同盟プロジェクト  
**Endangered Language Alliance Project**  
<http://endangeredlanguagealliance.org/main/about>

メアリーグローブ大学  
アフリカ系米国人文学・文化学会  
**Marygrove College  
African American Literature and Culture Society  
(AALCS)**  
<http://aalcs.marygrove.edu>

スミソニアン協会フォークライフ・文化遺産センター  
**Smithsonian Center for Folklife and Cultural Heritage**  
<http://www.folklife.si.edu>

スミソニアン・フォークライフ・フェスティバル  
**Smithsonian Folklife Festival**  
<http://www.festival.si.edu>

スミソニアン・フォークウェイズ・レコーディングズ  
**Smithsonian Folkways Recordings**  
<http://www.folkways.si.edu>

カリフォルニア大学バークリー校ユロク言語プロジェクト  
**University of California, Berkeley  
Yurok Language Project**  
<http://www.linguistics.berkeley.edu/~yurok>

ハワイ大学  
言語ドキュメンテーション研修センター（LDTC）

**University of Hawaii**  
**Language Documentation Training Center (LDTC)**  
<http://www.ling.hawaii.edu/ldtc>

---

米国国務省は、上記各資料の内容および入手の可能性については責任を負いません。インターネットリンクは2014年7月現在、全て有効でした。

---

米国大使館 広報・文化交流部  
アメリカンセンターJapan  
アメリカンセンター・レファレンス資料室

---

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室  
〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内  
Tel: 011-641-3444

アメリカンセンターJapan  
〒107-0052 東京都港区赤坂1-1-14 NOF溜池ビル8階  
Tel: 03-5545-7431

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室  
〒530-8543 大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル7階  
Tel: 06-6315-5970

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室  
〒810-0001 福岡市中央区天神2-2-67 ソラリア・パークサイドビル8階  
Tel: 092-733-0246

在沖縄米国総領事館・広報文化課レファレンス資料室  
〒901-2104 沖縄県浦添市当山2-1-1  
お問い合わせはオンライン質問箱をご利用ください  
<http://go.usa.gov/TCsP>

---

米国大使館のウェブサイト

---

米国大使館 <http://japanese.japan.usembassy.gov/>  
アメリカンセンターJapan <http://AmericanCenterJapan.com/>  
レファレンス資料室 <http://usinfo.jp/>